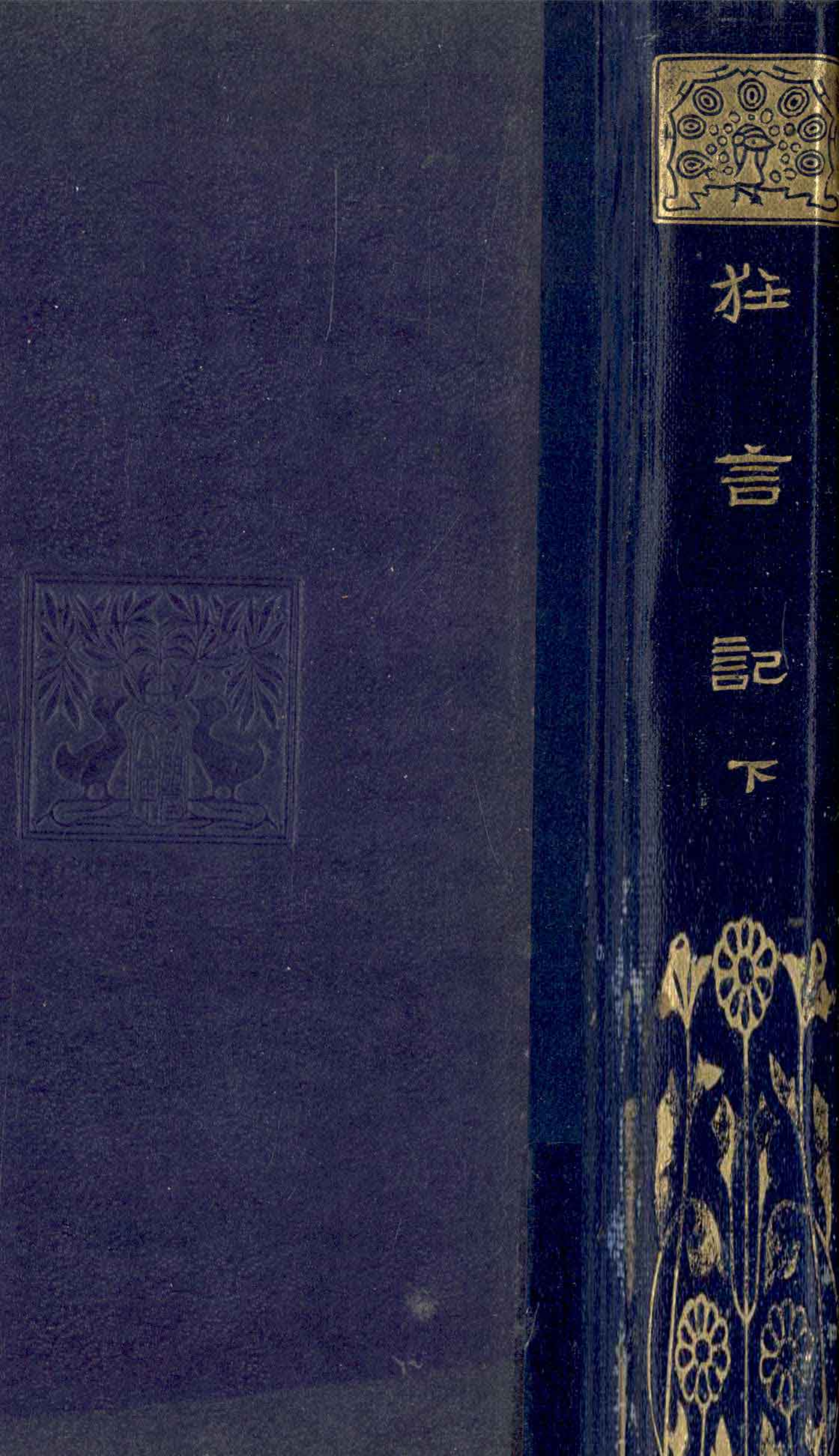

莊言記下

杜言記

下

昭和五年一月十日　印刷
昭和五年一月十三日　發行

有朋堂文庫
狂言記下卷
（非賣品）

東京府下大久保町百六久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦捷一

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

狂言記下　目錄

狂言記拾遺

卷之一

一　三本柱……一
二　文相撲……六
三　盜人連歌……一六
四　梟山伏……二四
五　通　圓……二八
六　雁かりがね……三三
七　樋の酒……三八
八　横　座……四四
九　枕物狂……四九
十　手負山賊……五六

卷之二

一　松の精……六一
二　祐　善……六五
三　唐人相撲……六九
四　どもり……七一
五　祇　園……七六
六　老武者……八〇
七　石　神……八五
八　松ゆづり葉……九〇
九　泣　尼……九五
十　鬮罪人……一〇二

卷之三

一　棒　縛……一〇九

二　水論聟……一二五
三　水汲新發意……一二九
四　若市……一三四
五　比丘貞……一三八
六　塗師平六……一三五
七　煎じ物賣……一四〇
八　合柿……一四五
九　三人百姓……一四八
十　禰宜山伏……一五三

卷之四

一　餅酒……一五九
二　鼻取相撲……一六五
三　樂阿彌……一七三
四　犬山伏……一七七
五　料理聟……一八三
六　茶盞拜……一九一
七　人馬……一九七
八　止動方覺……二〇三
九　挂杖……二一一
十　餌差十王……二一五

卷之五

一　對馬祭……二一九
二　蛸……二二六
三　鐘の音……二二九
四　腰祈……二三三
五　佐渡狐……二三八
六　八尾地藏……二四四
七　布施ない……二四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八 米市……二五六
九 鎧……二六四
十 雙六僧……二七〇

狂言記外篇

卷之一

一 張蛸……二七三
二 口眞似聟……二七九
三 今參……二八三
四 菌山伏……二九〇
五 昆布賣……二九三
六 柳樽……三〇一
七 琵琶借座頭……三〇四
八 因幡堂……三〇八
九 魚說法……三一一
十 首引……三一六

卷之二

一 寶の槌……三一九
二 伊呂波……三二三
三 名取川……三二六
四 痺……三三一
五 惡太郎……三三五
六 早漆……三三八
七 歌相撲……三四一
八 鷄聟……三四四
九 腥物……三四七
十 乳切木……三五二

卷之三

一 竹生島詣……三五七
二 八幡聟……三六四
三 連尺……三六九
四 附子……三七三
五 川上地藏……三七九
六 盆山……三八四
七 心奪……三八八
八 昆布柿……三九一
九 鬼瓦……三九六
十 花折……三九九

卷之四

一 雁大名……四〇三
二 骨皮新發意……四〇八
三 金津地藏……四一三
四 兄弟諍……四一九
五 鎌腹……四二三
六 杌か人か……四二七
七 鞠蹴座頭……四三一
八 饅頭食……四三五
九 隱し狸……四三八
十 手車……四四二

卷之五

一 樽聟……四四七
二 二九十八……四五一
三 鞦猿……四五四
四 二王……四五八

五　鬼淸水……四六二
六　女山賊……四六六
七　大般若……四七〇
八　柑　子……四七三
九　さつくわ……四七五
十　福の神……四八三

狂言記拾遺

卷之一

一 三本柱

シテ　素襖、烏帽子、小さ刀
四人　冠者　半上下、腰帶
二人　半上下、腰帶

▲シテ大名　眞中にて名乘る。　此邊に隱れない大名。某、頃日、思ふまゝに曹請の致して、悉く出來すました。これほど嬉しいことはござらぬ。それにつき、まだ銀藏を建てうと思うて、材木を見立てて、山に三本伐らせて置いた。のさ者共を呼び出し、今日は、取りに遣さうと存ずる。やいく、太郎冠者、あるかやい。▲太郎　はあ、御前に居ります。▲シテ　汝を呼び出すこと、別の事でない。ちと云ひ付くる事がある。次郎冠者、三郎冠者も呼べ。▲太郎

のさ者―のさばり者我儘者也

畏つてござる。なう〳〵、次郎冠者、三郎冠者、をりやるか。▲二人なか〳〵、これに居るわ。何事ぞ。▲太郎頼うだ人の召すわ。をりやれ。▲二人心得た。▲三人三人ともに、御前に詰めましてござる。▲シテ念なう早かつた。汝等を呼び出すこと、別の事でない。汝等も、この間は、精をいだして働いたによつて、某の普請が、思ふ樣に出來すまして、これほど嬉しい事はない。嘸汝等も、この間は草臥れたであらう。▲太郎御意なされます通、思召すまゝに御普請が出來まして、われ〳〵も喜ばしう存じます。▲シテまづはめでたいなあ。▲三人左樣でござります。▲シテそれにつき、又銀藏を建てうと思うて、木を見立てて、山に三本伐らせて置いたほどに、汝等三人行て取つて來い。▲三人畏つてござる。▲シテ山へ行たらば、三本ある木を、汝等三人して、二本宛持つて來い。▲三人畏つてござる。▲シテ最早行くか。▲三人參ります。▲シテ行たらば早う取つて來い。▲三人はあ。▲シテえい。▲三人はあ。▲太郎なう〳〵。何と思やるぞ。頼うだ御方は、何事もわつさりとして、御奉公が致しよいの。▲太郎いざ山へいて、材木を取つて來う。▲二人なか〳〵、參らう。▲太郎こ

頼うだ人―原本「頼う人」に作る

▲太郎―此形の重複せるは、詞と詞との間に所作あればなるべし

わごりよだちーそなたたち

身共次第ー自分の考通りに任せよとなり

ちへをりやれ、〳〵。▲二人 心得た。▲太郎 何と思はしますぞ。頼うだ御方は、御身代はよし、御子息達は持たせられ、この如くに、材木の出る山まである事なれば、果報な、めでたい御方ではないか。▲二人なか〳〵、おしやる通でをりやる。▲太郎 やあ、何かと申すうちに、これが山ぢや。何所もとに材木があるぞ。▲次郎 されば、何所にあるぞ。三郎冠者も見さしませ。▲三郎 心得てをりやる。▲太郎 やあ、是にあるわ。▲二人 まことに爰にあるわ。▲太郎 さあ〳〵、擔げて歸らう。わごりよだちも持たしませ。▲二人 心得てをりやる。▲太郎 やあ、まづ待たしませ、〳〵。▲二人 何事ぢや。▲太郎 いや〳〵、ちと樣子がある。下に置きやれ。▲二人 心得た。▲太郎 まことに失念したことがある。頼うだ人の仰せらるゝは、三本ある柱を、三人の者どもに、一人して二本づゝ持つて來いと、仰せられたではないか。▲二人 まことにさうでをりやる。うつかりと心得た。どうしたものであらう。▲次郎 しやうがあるぞ。身共次第にしやれ。さあ〳〵、これへ寄つて擔ぎやれ〳〵。▲太郎 いやいや、これではない。まづ下に置きやれ。何としたらば、二本づゝ持たれうぞ。やあ、思

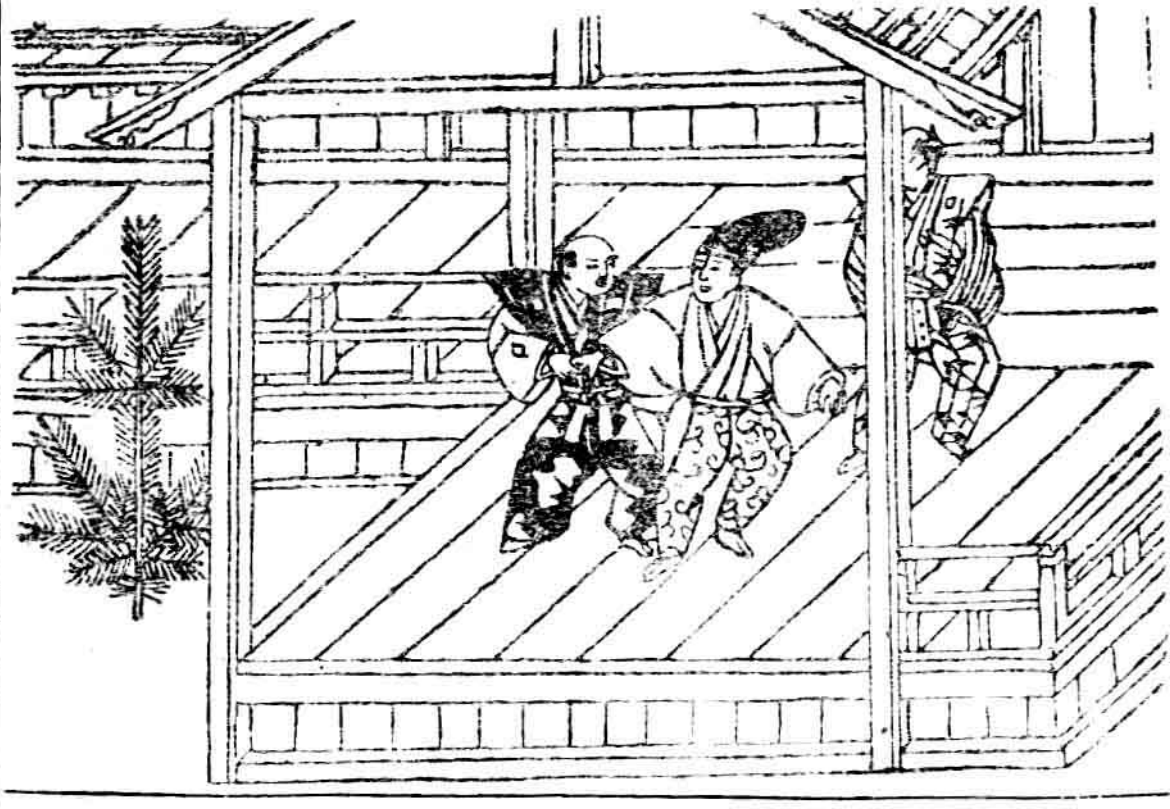
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三本の柱云々―曲がかりげにも云々―囃詞也

ひ出した。しやうがあるぞ。身共次第にしやれ。こゝにて柱をAかくのごとく置きて、さあ〳〵、この角々を、これへ寄つて擔ぎやれ。それでは一人して、二本づゝになるわ。▲二人まことにさうぢや。いざ擔げて參らう。▲太郎これはよいわ。なう〳〵、何と思やるぞ。これは頼うだ人が、われ〳〵が智慧を試さうと思うて、云ひ付けられたものであらう。▲二人さうでをりやろ。▲太郎何と、めでたい折柄ぢや。いざ、とてものことに、囃子物して歸らう。▲二人一段よかろ。▲何と云うて囃す。▲太郎とかく知れた通に、三本の柱を三人の者どもが、二本づつ、持つたり〳〵や持つたりと、云うて囃さう。▲二人これは一段よからう。さあさあ、囃しやれ、〳〵。▲三人三本の柱を三人の者共が、二本づゝ持つたり。これ〳〵御覽候へ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの、〳〵。▲シテこれはいかなこと。三人の者共が、智慧を見やうと思うて、云ひ付けたれば、囃物して歸つた。出ずばなるまい。▲シテ詞如何にや〳〵、太郎冠者、三人ともによう聞け。三本の柱を三人の者共に、二本づゝ持てとは、智慧のほどを見んため。▲三人持つたりや、〳〵。げにもさあり。▲シテ何かの事

は入(い)るまい。つうと内(うち)へ持ちこめ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの、く。

新座の者―新参者



二文相撲

三人　シテ　素襖、烏帽子、小さ刀
　　二人　半上下、腰帶

▲シテ　眞中にて名乗る。八幡大名です。かやうに過は申せども、使ふ者は只一人。一人にては人が使ひ足らぬほどに、新座の者を大分抱へうと存ずる。まづ、太郎冠者を呼び出して申しつけう。やいく、太郎冠者居るか。▲冠者　はあ。▲シテ　居たか。▲冠者　御前に居ります。▲シテ　念なう早かつた。汝を呼び出すこと、別の事でない。汝一人では、人が使ひ足らぬ。新座の奉公人を大分抱へうと思ふが、何と好かろか。▲冠者　これは、なかく好うござりましよ。▲シテ　何

くわつと―ずつと
勝手―勝手元の賄

程置いてよかろ。▲冠者されば、何程がようございましよぞ。▲シテやあ、千人ほどおかう。▲冠者それは大分の人でござる。置所がござるまい。▲シテいや、廣い野山へ追ひ放して置かうまで。▲冠者なか〳〵、野山において奉公はいたしませぬ。▲シテそれなら、くわつと減さう。物ほど置かう。▲冠者何程でござる。▲シテ五十ほど置かう。▲冠者それでも、勝手の堪忍がつゞきますまい。▲シテ堪忍と云ふは、食物のことか。▲冠者なか〳〵、さやうでござる。▲シテ深山にある水を飲ましておけ。▲冠者いや〳〵、水など食べましては、御奉公は致しませぬ。▲シテそれなら、これも、もそつと減さう。づんと減して二人おかう。▲冠者とてものことに、も一人減したら好うござろ。▲シテいや〳〵、汝ともに二人ぢや。▲冠者すれば、新座者は一人でござる。▲シテなか〳〵、さうぢや。▲冠者これが一段ようござりましよ。▲シテその義なら、汝は上下の街道へ行て、好ささうな者が來たらば、抱へて來い。▲冠者畏つてござる。▲シテもはや行くか。▲冠者かう參ります。▲シテやがて戻れ。▲冠者はあ。▲シテえい。▲冠者はあ。やれ〳〵、急な事を申しつけられた。まづ街道へ參り、

よからう者が参つたら、抱へて参らうと存ずる。まことに、只今までは、某一人で、殊の外苦勞いたしてござるが、新座のものが参つたらば、樂を致すでござらう。参る程にこれが街道ぢや。まづこの所に待つて居やうと存ずる。▲取手罷出でたる者は、東國方の者でござる。某、今に上方を見物致さぬ程に、この度都へ上り、見物いたし、また好ささうな所もあらば、奉公致さうと存ずる。まづ、そろ〳〵参らう。まことに人々の仰せらるゝは、若い時旅をせねば、老いての物語が無いと申さるゝによつて、俄に思ひ立つてござる。▲冠者やあ、似合しい者が参つた。言葉をかけて見やう。なう〳〵、これ〳〵。▲取手こちのことか。何事でござる。▲冠者そなたは、どれからどこへ行く人ぞ。▲取手私は奉公が望で、都へ上ります。▲冠者それは幸ぢや。身共の頼うだ人は大名ぢや。これへ肝入つて出してやろ。▲取手それは忝うござる。御肝入られて下され。▲冠者その義なら、只今同道いたさう。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲取手参ります。▲冠者なう〳〵、何と其方に藝は無いか。▲取手されば、かやうのものも藝になりましよか。▲冠者何でをりやる。

肝入つて―世話をして

鞠—蹴鞠
庖丁—料理
双六—碁の類也
賽の數によりて石を送り勝負を決す
やつと參つた—相撲などの勝負事
萬能—多くの藝能を心得ること

▲取手 弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えました。▲冠者 さても萬能の人ぢや。その通中したらば、お氣に入るであらう。さあ〳〵、早うをりやれ。やあ、何かと申すうちに、これぢや。其方を同道した通中さう。それに待ちやれ。▲取手 心得ました。▲冠者 賴うだお方、ござりますか。太郎冠者が歸りました。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたか〳〵。▲冠者 ござりまする〳〵。▲シテ 戻つたか。▲冠者 只今歸りました。▲シテ やれ〳〵、骨折や〳〵。何と、新座の者抱へて來たか。▲冠者 なるほど、抱へて參りました。▲シテ どこもとに居るぞ。▲冠者 御門外に待たせておきました。▲シテ それなら、物は初からが大事ぢや。彼奴が聞く樣に、過を云はうほどに、汝は色々に答へ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ やい〳〵、太郎冠者居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 床几を持つて來い。▲冠者 畏つてござる。お床几でござる。▲シテ 何と、今の聲を聞かうなあ。▲冠者 なか〳〵、承りましよ。▲シテ それなら、あれへ行て云はうは、賴うだ人、只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをしやれ、お目に入つたら、そのまゝ御見參であろ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com